



地域みんなの居場所づくりをJA女性部で ——JA高知県女性部大篠支部が展開する「大篠子ども食堂」

小川理恵（一般社団法人日本協同組合連携機構〈JCA〉主席研究員）

「大篠子ども食堂」の参加者は多種多様。JA支所を会場に、地域みんなの居場所にしたいという思いから、親子に限らず、地域の誰もが参加できる開かれた場所になっています。女性部活動で得たスキルを生かし、バイキングスタイルで料理を提供するワクワクする子ども食堂です。

地域の課題を女性部で共有

高知空港にほど近いJA高知県（旧JA南国市）大篠支所。2階にある調理室兼会議室を会場に、毎月第2土曜日に「大篠子ども食堂」が開催されている。運営するのはJA女

おがわ・りえ

1997年にJCAの前身である社団法人地域社会計画センターに入会。総務課長、企画調整室長を経て研究職に職種転換、現在に至る。研究分野は地域づくりと女性活動。著書に『魅力ある地域を興す女性たち』（農文協、2014年）、『事例から学ぶ 組合員と進めるJA自己改革』（共著、家の光協会、2018年）。

性部大篠支部のメンバーだ。平成30年5月にスタートして以来、毎回200人もの参加者が集まる人気の子どもの食堂として、地域に根付いている。

きっかけは、民生委員を務めるJA女性部



1. 迷いながら皿に盛るのもバイキングの楽しみ 2. たくさんの手作り料理が楽しめる
3. あったかいおみそ汁は女性部員から手渡し 4. 会場に集まったたくさん子どもたち

員からの情報だった。JA支所の裏手にある小学校は、児童数800人近くという県内一のマンモス校だが、夏休み明けに、痩せて登校してくる子どもがいるという。そのような地域の現状を知り、問題意識を女性部員で共有する中から、JA女性部大篠支部として子ども食堂に取り組んでみよう、という方向性が導き出された。

JA女性部で子ども食堂をやろう！

子ども食堂という選択に至った理由として、2つの背景が挙げられる。

1つは高知県が「子どもの居場所づくり推進事業」として、子ども食堂への支援を積極

的に行っていることだ。高知県は高齢化率が高い一方で、若者や子どもの貧困対策へのニーズも高い。そこで県では、保護者の孤立感や負担感を軽減し、地域における見守りの場としての機能が期待されるとして、子ども食堂をその結集軸に位置付け、子ども食堂の取り組みに対して、実務面・金銭面の両方向から手厚い支援を展開している。

県の方針を受けて南国市に設けられた「こども相談係」は、子ども食堂の運営者と県とを結び付ける役割を果たしており、JA女性部大篠支部も、こども相談係を窓口として、県から派遣された社会福祉協議会のコーディネーターの指導のもと、開設までの諸手続き

や補助金の申請などをスムーズに進めることができた。

もう1つは、JA女性部大篠支部で、「二四六九女士会」などの目的別グループ活動を広範囲に行ってきたことが挙げられる。二四六九女士会は年に8回程度、大篠支所2階の調理室兼会議室にメンバーが集まり、10種類以上もの料理を共に作り、食事をしながら、手芸などの趣味も楽しむ活動だ。この他にもJA女性部大篠支部全体での視察旅行、食や農に関する勉強会など、活発な活動を重ねてきており、これまで女性部で実践してきたことを、何か地域のために役立たせたい、と考えたことが、子ども食堂の取り組みへとつながった。

開催場所はJAの調理室兼会議室で

子ども食堂の運営に参加するメンバーの募集に当たっては、女性部役員が部員を対象にアンケートを取り、部員全員の希望を聞いた。「子ども食堂の現場で手伝いたい」「食材の提供ができる」「参加しない」の3択としたところ、部員93人のうち二十数人が「現場で手伝いたい」に手を挙げたほか、食材提供希望者も多数いた。高齢により参加できないとした部員も「開催日には参加者として食事に行くよ」と言ってくれた。

問題となるのが会場である。使い慣れたJAの調理室兼会議室を利用したいが、子ども食堂の開催日は土日や祝日となる。金融機関でもあるJAの休業日に不特定多数の人が集



- 5. 子ども食堂チラシ
- 6. JA支所1階入り口に設置された看板
- 7. 子どもが食べやすいようひと手間かけておにぎりに

8. 1階の受付には参加者が次々とやってくる 9. さすがJA女性部、手際は抜群！



栄養と愛情
たっぷりの料理！

まることの許可が得られるか不安だった。しかし支所長に相談すると「ぜひやってみましょう!」と、快諾を得ることができた。

調理室兼会議室は、県の「高知家子ども食堂登録制度^{*}」に登録できたことと、女性部員が清潔に、大切に施設を利用してきたことで、保健所から「福祉目的扱い」として運営の許可を得ることができた。また、食品衛生責任者養成講習も役員みんなを受講した。

開催日は毎月第2土曜日の11時半から14時半。毎回JAの担当者が会場となるJA支所の解錠・施錠を行うほか、子ども食堂の開催中は、必ずJA職員が同席して活動を見守っている。休日出勤となるJA職員は、代休制度で過重労働とならないようにしている。光熱費もJAが負担している。

^{*}子ども食堂の取り組みを県内全域に普及・定着させるため、一定の要件を満たした子ども食堂を登録する制度。登録されると、県のホームページなどで、活動状況や開催案内が広く発信されるほか、「子どもの居場所づくりネットワーク会議」などの情報交換の場にも参加することができる。

食材も地域から

みんなで創る子ども食堂

子ども食堂で使用する食材は、JA、女性部員、組合員、地元のスーパーなど、地域のさまざまな団体や個人から提供されている。米は地域の米農家やJAから提供されるほか、旧JA南国市の高田幸一元組合長も寄付している。毎回7~8升炊くので大助かりだ。ほかにも多くの生産者が農産物を提供している。

小中学校の「学校だより」や市の広報誌などに掲載されたことや、JAの広報担当者が『日本農業新聞』『高知新聞』、地元テレビ局などに積極的に働き掛けたことで、子ども食堂の情報は瞬く間に広がり、初回から多くの

参加者が集まった。それだけでなく「自分も食材を提供したい」と協力を申し出る農家や、県の施策を受けて、全支店でサポート体制を取るスーパーなども現れた。

女性部のメンバーも、食材を提供してくれそうな生産者や企業に積極的に声を掛けた。毎回300個以上使用する卵は、JA女性部役員が、鶏卵業者に思い切って願い出て寄付として提供が実現したものだ。

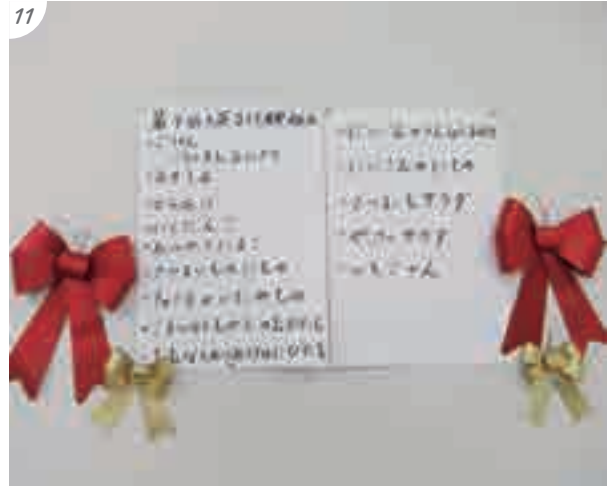
子ども食堂の会場となる調理室兼会議室には、女性部員が手書きした食材提供者の一覧表が毎回張り出される。市の広報誌で子ども食堂の存在を知り、初回から継続してダイコンなどの野菜を提供している組合員の男性は、子ども食堂開催日には必ず会場を訪れている。自分が育てた野菜を、子どもたちがおいしそうに食べる姿を見るのが楽しみだという。

スキルを生かしバイキングスタイルで提供

大篠子ども食堂の大きな特徴は、カレーライスのような一品料理ではなく、複数の料理をバイキングスタイルで提供していることである。二四六九女士会などで得た料理のスキルを生かし、地域の素材が満載の家庭料理を好きなだけ食べてほしいと、負担は大きいもののバイキング方式を選択した。1回に作る料理は14~16種類。おにぎり、唐揚げ、煮物、サラダ、汁物、デザートと、全て心の込められた手作りだ。

開催日は朝8時半から作業に取り掛かる。取材日(昨年12月8日)のメンバーは16人。長年の活動から自然と役割分担ができており、手際良くどんどん料理が出来上がっていく。受け付けを済ませた参加者たちが、会場入り口にすでに長蛇の列を作っている。

さあ、子ども食堂のスタートだ。



10. 野菜を提供してくれた農家の方と窪田支部長 11. 手作りの「今日の献立表」

子どもだけじゃない 地域みんなの「居場所」

「子ども食堂オープンです！」。JA女性部大篠支部長窪田理佳さんの元気な声を合図に、入り口で待っていた人たちが続々と会場に入ってくる。目の前に並んだ彩り豊かな料理の数々に称賛の声が上がる。「わーっ、おいしそう!」「これは何かな?」。目移りしながら、思い思いの料理をプレートに盛っていく。この子ども食堂で初めてバイキングスタイルに触れる子どもも多い。「何回お代わりしてもいいの?」と女性部員のエプロンの裾を引っ張り質問してくる子もいる。各テーブルには季節ごとの花やオーナメントが飾られるなど女性らしい配慮に満ちている。

参加者は、子ども数人のグループ、赤ちゃん連れの若い夫婦、祖父母も含めた3世代一家、お年寄りだけのグループ、男性の2人組など、多種多様だ。子どもだけでなく、地域みんなの居場所という思いから、参加を親子だけに限っていない。参加費は、小学生以下は無料、中学生は100円、大人でも300円だ。

今日が2度目の参加だという若いお母さんは、「家では食べない野菜も、ここではなぜ

か食べてくれるんです」とうれしそう。少年サッカーチームで来たという小学校4年生の少年たちは、何度もお代わりに立ちにぎやかだ。おばあちゃん6人のグループは「子どもたちが喜ぶ顔を見ながら食べるご飯は本当においしい」と顔をほころばせる。

会場には近隣の小中学校の教員も顔を出し、子どもたちの様子をさりげなく見守っている。小学校の先生によると、児童のうち4人に1人は、1度はここに来ているという。「不登校の子も、家庭に問題がある子も、学校では人間関係がうまくいっていない子も、子ども同士仲良く食卓を囲んでいたりします。子ども食堂は給食とは違ったコミュニケーションツールとして、不思議な力を持っているようです」

レッテルを貼らない 開かれた場所

「子ども食堂は貧しい子どもが来る場所」というネガティブなレッテルを貼れば、本当に助けたい子どもが来づらくなります。だからあえて間口を広げ、いろいろな子ども、いろいろな年齢の人たちが集い、わいわいと地産地消を楽しむ場にしたい。自由な雰囲気の中で、

貧困に苦しんでいたり、食生活が乏しかったりする子どもが、気負うことなく自然に参加してくれたらいいと思っています」と窪田支部長は活動にかける思いを話す。

取材日の参加者は、全部で179人。そのうち子どもは100人近く、あとは、子どもを連れてきた親御さんや近隣住民などだ。「一人暮らしのお年寄りなどが、月に1度、地域の人たちと一緒に楽しくご飯を食べられる場、それもこの子ども食堂の役割の一つです。これからも、地域みんなの居場所であり続けたい」

JA女性部が地域とJAをつなぐ

開始から1年近くがたち、大篠子ども食堂は、今や高知県一規模の大きな子ども食堂へと成長した。窪田支部長は、JA女性部が子ども食堂を運営することには、大きく2つの意味があるという。1つは、利用した子どもたちが、正面から食と向き合える大人になってくれるだろうということだ。なぜなら、この子ども食堂を運営するのは、食と農に一番近いJA女性部員だからだ。

もう1つは、活動を通して、地域の人々がJAを身近に感じるきっかけになっていること。「JA支所の2階にたくさんの地域住民が

集う、それだけでもすごいことです。女性部がJAと地域を結んでいるのです」

地域課題への気付きから始まった大篠子ども食堂は、JAの後押しや、生産者などの協力を得ながら発展し、地域住民のよりどころとして定着しつつある。その中心にいるのは、紛れもないJA女性部員たちだ。

「ここは、なぜかほっとする地域の救いの場。子どものため、母親のため、高齢者のため、そして運営するJA女性部員のためなど、数え切れない意味を持っています。これからも継続して活動できるよう、地域全体で支えたい」と、近所に住む男性が涙ぐんでいたのが印象的だった。

窪田支部長は「私たちの活動を全国各地のJA女性部にも知ってもらい、子ども食堂の活動の輪を広げたい」と抱負を話す。

高知県内12JAの広域合併により、JA南国市は平成31年1月からJA高知県となった。大篠子ども食堂は、今後もJA女性部大篠支部の活動として継続して開催する予定であり、JAは、女性部の主体的な活動として見守る一方で、女性部だけでは足りない部分を補うかたちで、さらなる応援を続ける方向だ。

農業・地域・JAを担うリーダーの雑誌



7月号 定価 606円(税込)

JAグループ 家の光協会
〒162-8448 東京都新宿区市谷船河原町11
TEL:03-3266-9002 FAX:03-3266-9047
<http://www.ienohikari.net>

特集 令和時代の「食料安全保障」はどうあるべきか

食料・農業・農村基本計画は、2020年の改訂に向けた議論がスタート。農業もグローバル経済に取り込まれたいま、食料安全保障は、自給率や自給力だけで考えてよいのでしょうか。これからの時代にふさわしい「食料安保のあり方」を探ります。

出会いがあるから、オレがある「師弟」の肖像

農業経営者として成長するためには、“師”と仰ぐ存在が不可欠。これまでの半生で、JA青年組織活動を通じて、かけがえのない出会いからその後の農業への姿勢が大きく変わった人も少なくありません。多くの出会いから生まれる可能性を原動力にした、自己を高める契機づくりをめざします。

(タイトル、内容は変更することがあります)